



## コープさっぽろ × 道内16市町村

### コープ未来(あした)の森づくり基金

コープさっぽろの「コープ未来(あした)の森づくり基金」は、生活協同組合らしい森づくり活動のための基金である。コープさっぽろの基金事務局が実務を担当し、組合員、職員、森づくり活動家、学識経験者が参加する運営委員会によって、全道190万人の組合員が森を楽しむ気持ちを広げる仕組みを作っている。

#### 多面的な視点を持って 人々が森と関わる 環境をつくる

地球温暖化問題を主要テーマに掲げ、環境・気候変動はもちろん、森林についても集中的に議論が行われた「北海道洞爺湖サミット」が開催された2008年7月、時を同じくして設立されたのが、コープさっぽろの「コープ未来(あした)の森づくり基金」である。コープさっぽろでの買い物の際にレジ袋を辞退すると1回につき0.5円が基金に積み立てられ、幅広い年齢層が参加する植樹活動



地域の団体や人々と  
森との関わりを結ぶ活動

森づくり団体と組合員が森で楽しむ時間を共有する「森づくり団体交流」



自分たちの住む地域での植樹活動は、植えて終わりではなく、周りの草を刈ったり、効率よく生長するように枝を払うなどの育樹活動にもつながっていく。

#### 専門的なことは地域に託し お金・ひと・情報で 価値を創造

北海道をはじめ行政や地域自治体と協定を結んで森づくりを進める「コープの森」は、2022年現在で道内16カ所にあり、その植樹本数も11万本を超えている。この先を見据え、植樹から一歩進んだ森づくりに組合員が参加できるような仕組みが求められるようになり、そこで始まったのが「森づくり団体交流」だ。コロナ禍によって十分な活動ができない状況が続く中で交流について、「道内各地で重要な活動をされている団体が抱えている課題の解決には、たくさんの人々の協力や参加が必要です。この交流がそのきっかけとなり、団体の活動が広がることを目的としています」と酒井さんは語る。さらに、北海

道のさまざまな森づくり団体を支援するための助成金制度も設けている。「専門的なことは地域の森林組合や森づくり団体にお任せして、コープさっぽろは、お金・ひと・情報の面で価値を生み出したいと考えています」。2011年から年2回発行するレポート誌「モリイク」は、基金活動の活動報告・会計報告に加えて、森に関する活動家からの寄稿、木育マイスターのエッセイ、植物の図鑑、森の情報をイラストで伝える記事など、広報誌としてだけではなく、森への興味を喚起する媒体となっている。



人と森をつなぐ冊子「モリイク」

#### 北海道の森と暮らしを “つなぐ”機会を拡大

江別市にあるコープさっぽろのリサイクル施設「コープさっぽろエコセンター」の隣には、森づくりや基金のことを紹介する「トドックエコステーション あすもり資料室」があり、環境教育や木育活動の拠点として活用されている。秋のある日、その敷地内で日頃から組合員活動に参加している組合員による植樹が行われていた。「ここでの植樹活動が始まって5年ほどですが、コロナ禍の前は小さいお子さんも参加していて、どれくらい大きくなるのかと楽しみに植えていた木が今では2mを超えています」と語る酒井さんが期待するのは、森を身近に感じることで普段の生活の中で森や自然を大切にしようとする意識が芽生え、それが行動へとつながることである。「日本にいとあまり感じませんが、地球全体でも森林が残された地域はわずかであり、非常に貴重です。幸い、北海道には多様な豊かな天然林がたくさんあります」。こうした環境があること、それを後世に残そうとしていること、これこそが世界的に見ても大きな価値であると酒井さんたちは考えている。日々の買い物を通じて基金に協力している組合員、基金のサポートで植樹・育樹活動を行っている地域の団体、それらの人々を森へと“つなぐ”機会を拡大する、それはコープさっぽろのテーマ“つなぐ”の具現化に他ならない。



生活協同組合コープさっぽろ  
コープ未来(あした)の森づくり基金  
事務局長

酒井 恭輔さん



2008年7月に「北海道洞爺湖サミット」が開催されたことを機に、買い物の際のレジ袋辞退による組合員参加型の「コープ未来(あした)の森づくり基金」を設立。



道内16カ所の「コープの森」での植樹本数も11万本を超え、一歩進んだ森づくりとして「森づくり団体交流」や「森づくり助成制度」などを進めている。



世界的にも貴重な北海道の森林環境を保全し、将来に残していくため、森と暮らしを“つなぐ”機会をさらに拡大し、各自の行動へとつなげていきたい。





**AIRDO**  
×  
**就航6地域**

**エア・ドゥ絆の森**

エア・ドゥでは、2008年から就航する道内6地域で植樹等の森林整備活動を実施している。CSR活動方針の1つに掲げる「(北海道の)自然を大切にす」活動の一環であり、植樹に加えて育樹を通じた木育活動にも取り組んでいる。



2008年9月に初の「エア・ドゥ絆の森」としてスタートした千歳市の旭加地区。インターバルを置きながら合計15,000本のトマツとカラマツを植樹してきた。



2008年に就航10周年記念事業として、北海道の「ほっかいどう企業森林づくり」と連携した「エア・ドゥ絆の森」をスタート。



地域との連携により、エア・ドゥが就航する千歳・旭川・函館・女満別・帯広・釧路の道内6地域において植樹等の活動を展開。



植樹に加え下草刈り等の育樹も継続して行うことにより、「エア・ドゥ絆の森」の名通り地域との絆を深める活動していきたい。



自然環境保全の一環として「JTの森」での森林保全活動を始めるJTが、2010年12月に「JTの森 積丹」をスタートさせた。



「海を育む水源の森づくり」をコンセプトに、第一期は森の手入れに取り組み、第二期は森林の利活用を通じた地域振興にも力を入れている。



積丹の自然を学ぶカルタや積丹GINとの連携計画など、地域の企業や人々と協力しながら豊かで健全な森づくりを進めていきたい。



常緑のトマツと黄葉の美しいカラマツを織り交ぜて植えることによって、「AIRDO」の文字が浮かび上がるようにしている。

CSR活動の一環として  
**道内6地域で森づくりを実施**

「北海道の翼」として1998年に就航開始したAIRDO(以下「エア・ドゥ」)では、「人を育てる」「(北海道の)自然を大切にす」「社会に貢献する(災害復興支援)」をCSR活動の3つの柱に定め、北海道をはじめとする地域社会との連携のもとで社会的課題の解決に取り組んでいる。2008年に就航10周年記念事業として、北海道洞爺湖サミットにおける主要テーマ「地球環境保全」への寄与を目的に活動をスタートさせた「エア・ドゥ絆の森」は、そのCSR活動の一環である。北海道の「ほっかいどう企業森林づくり」と連携して、エア・ドゥが就航する千歳・旭川・函館・女満別・帯広・釧路の道内6地域で植樹等の活動を展開している。北海道との関係強化を目的として2022年に新設された北海道室の大鎌さんが「北海道に支えられ、育まれたエア・ドゥとして、地域との連携をさらに深めていくことが重要と考えています。「エア・ドゥ絆の森」は、その名の通り社員や地域の絆を深めるための活動です」と語るように、森づくりには社員とその家族をはじめ、地元の人々も多く参加している。

森林を整備することで  
**北海道と地域社会に貢献**

就航20周年となる2018年には、初就航の地である千歳市旭加地区で改めて森林整備に取り組んでいる。「2008年に植樹した隣接地に森を拡大しています。2020年からは枝打ち等の育樹を通して人と人、人と地域をつなぐ木育活動にも取り組んでいます」と大鎌さん。10年かけて育てた森は、上空から見ると「AIRDO」の文字が浮かび上がるまでに成長した。「飛行条件によっては、機内から見えることもあるそうです」。エア・ドゥに搭乗した際には、そんな絆の形を探してみたい。



株式会社AIRDO  
北海道室 副室長  
**大鎌 信子さん**



**JT北海道支社**  
×  
**積丹町**

**JTの森 積丹**  
～海を育む水源の森に～

全国で森林保全活動を進めている「JTの森」。2010年12月から積丹町と協定を結びスタートした「JTの森 積丹」では、「海を育む水源の森づくり」をコンセプトに、森林の利活用を通じた地域振興にも力を入れている。



制作した「かるた」は、学校行事や自然観察会などの野外学習等に導入ツールとして活用されるほか、イベント雨天時の室内レクリエーションとしても有用である。



地元の人々と一緒に考える  
海と森林とのつながりの深さを

「JTの森 積丹」に生えている木の葉っぱやキノコを集めるビンゴゲーム。楽しみながら森の樹種についての知識を深めることができると参加者にも好評のレクリエーションだ。

川と海を含む流域の生物にも  
**恵みをもたらす森を育てる**

JTグループでは、自然環境保全の一環として森林保全活動を進めている。全国9カ所にある「JTの森」は一定期間借り受けた森の手入れを支援する活動で、地元の協力のもと、保全活動を行っている。「JTの森 積丹」のコンセプトは、川や海にも恵みをもたらす「海を育む水源の森づくり」。第一期の活動では森の手入れに取り組み、従業員が地元の人々と共同でボランティア作業を行う「森づくりの日」も設けられた。2021年からの第二期は、広大な土地を利用したアクティビティなどによる森林の利活用や、小学生を対象とした木育教室の開催等を通じ、地域とも協力し合いながら活動を進めている。パートナーの株式会社地域環境計画と共同で製作した「JTの森 積丹 いきものこぼれ話カルタ」は、森・川・海のことを楽しく知ることができるコミュニケーション&ラーニングツール。2010年～2011年、2018年～2019年に実施した生態調査の結果と既存の学術論文等の情報を基にしたカルタで、担当の須賀さんによると「積丹町の小学校で、児童が地元の自然を学ぶツールとしてご活用いただいています」とのことだ。

地元発の新たな名産品  
**積丹GINとの連携も視野に**

森林の利活用で計画が進んでいるのが、積丹町の新たな名産品として人気が高まっている「積丹GIN」との連携だ。「積丹GINの製造には、ボタニカルと呼ばれる植物性の素材が不可欠です。積丹GINのボタニカル原料を育てる場所として「JTの森 積丹」を活用できないか検討しています」と語る須賀さん。今年初めには、森の間伐材で作った木箱入りの限定商品も発売された。人々のコミュニケーションをなめらかにしてくれる積丹GIN、この連携で新たなラインナップが誕生することに期待したい。



日本たばこ産業株式会社  
北海道支社 総合営業第4チーム 主任  
**須賀 久世さん**